

令和元年度 岡山操山中高等学校スーパーグローバルハイスクール
第2回 運営指導委員会

- 1 日 時 令和2年1月27日 (月) 13:30 ~ 16:30
- 2 場 所 岡山操山高等学校 百周年記念会館会議室
- 3 出席者
 ○運営指導委員(50音順)
 ウィリアムズ・ジェイソン ノートルダム清心女子大学英语研究センター 准教授
 奥井 浩平 日本貿易振興機構岡山貿易情報センター 所長
 神崎 浩二 岡山県経済団体連絡協議会 事務局長
 福本 昌之 大分大学大学院教育学研究科 教授
 ○管理機関
 鶴海 尚也 岡山県教育庁高校教育課 総括副参事
 森 良恵 岡山県教育庁高校教育課 指導主事 (副参事)
 ○本校出席者
 近藤 治 大崎 智浩 三村 直子 森 泰三 片山 智司 柴田 茂徳
 山本 浩史 貝原 謙二 磯本 彩子 時岡 佳正 赤木 真一郎
 阿部 泰久 矢吹 仁志

- 4 内容
 ・SGH 運営指導委員会
 今年度の取組みと成果・課題、並びに意見交換・指導・助言
 (1) 未来航路：貝原
 (2) SOZAN 国際塾：磯本
 (3) GLOBAL STUDIES：山本
 (4) SGH 事業の成果と課題 今後について：柴田
 ・授業見学 (1年生；2年生に向けて 2年生：課題研究発表会準備)
 ・意見交換、指導、助言
- 5 運営指導委員会 (司会) 福本
 (1) 未来航路：貝原
 本年度後半の未来航路取り組み状況と、来年度の課題について
 未来航路の流れ
 1年生 課題研究 基礎力育成 (ディスカッション、ポスターセッション等)
 2年生 課題研究
 3年生 課題研究 発展
現状
 1年生 昨年度からの課題であったコミュニケーション能力のさらなる育成

- ディベート大会 (12月25日) テーマ：すべての高齢者の運転免許返納の是非 (生徒感想) 多角的な視点で論理的に物事を考える大切さを学んだ、自分の意見をコンパクトにまとめるのが難しかった、発信力や表現力を磨きたい 等
 これらの意見を未来航路通信を通じて生徒、教師で共有化した。
 2年生 課題研究のテーマ設定 準備の早期化
 ○昨年度までどんな問題をテーマとして考えたらいかがいかわかぬ生徒の理解が進んでいない中でテーマ決め・班決めを行い、モチベーションが上がりにくく時間的に足りない状況となっていたため、昨年度の約2倍の時間を掛けて3学期の計画を立てた。
 ⇒前半4時間で課題意識を持たせ、後半4時間でミスマッチがないような班分けとなるようにする。
 ○課題意識を持たせやすくするため、扱うテーマを従来の6系統から、SDGsに沿った17項目 (本校ではパートナーシップを除いた16項目) を3領域 “Life” “Welfare” “Environment” に分ける分類方法に変更した。
 ○3学期のこれまでにグローバル研究の良さや、2年までの全体像、課題研究を進めるにあたっての注意点(岡山大学黒神教授より講義)についての説明を行い、岡山大学や企業のSDGsの取り組み事例を紹介するなどし、身の周りの課題に移して操山高校の抱える課題を生徒の目線でディスカッションさせた。(KJ法の活用)
 本日の見学授業では、新聞記事などを使い世界の課題がいずれかのSDGsに関わっている、複数の目標が関連性があることなどに気付かせる活動を行う。

課題

1年生

未来航路の時間内で協働して行う仕組み作りと、大学・企業とのSDGsを目標に掲げた連携方法を考えていく必要がある。

2年生

- ・ 研究計画、テーマの早期設定 ⇒ 5月時点で終了
- ・ 文献や資料収集でききる研究環境整備
 現在までの取り組み
 ○6月の修学旅行(関東方面)で企業や関係機関への班別訪問研修を実施し、それを受けて校外でのインタビュー ((株)ハローズのフードロス対策「ハローズモデル」等)、本校へ講師を招いてのインタビュー (フードバンク岡山等)、大学・企業との連携 (岡山大学で高倍率の顕微鏡を使った物質断面の撮影、大学院生の研究課程とコラボし、(株)両備と連携して高校生の視点を立った岡山駅周辺の観光マップ作り等)
 ○ICTを積極的に使った取組み (グループアプリを使ったテレビ会議、教育セミナーに参加しての他校教諭へのインタビューやテレビ会議、アンケート調査にグループフォームを使用するなど、Wi-Fi 環境を利用しネットワーク上のコンテンツを利用した活動)
 今年度新たな取組み
 国際塾生を6系統に配置して活動することで、昨年度まで大学教授や大学生大学院生から助言が受けられなかった状況が解消され、塾生の取り組みが塾生以外の生徒にも良い影響を与えた。
 ・ 大学との課題をさらに具体的に積み上げていき、次の年度に継承する。

3年生

選択希望者の増加が課題であったが、科目選択の際に「総務省統計データ分析コンペティション」特別賞受賞の生徒に活動状況を説明してもらった結果、1名から5名に増加した。

<意見交換・指導・助言>

福本：課題研究の分野が多岐に渡っており、その内容が複雑であるため、課題研究の授業だけでは知識の繋がりがという点で十分とは言えないと思われすが、他の授業、他教科の学びがどのように生かされているのでしょうか。

貝原：広く社会の問題を捉えるという点では1年生の現代社会の授業や資料集の活用等、個々の生徒の研究は各教科での学びをベースにし、それを発展させたものになると思います。また授業の中で自分たちの作品をグループに入力しておきなさいというよう関連させた課題の出し方をされている場合もあります。

時間：1年生1学期では「ラーメンで世界進出」ということで色々な学問系統に分かれて研究しており、最終的にはすべての学問はひとつに繋がっているよねというところに落とすことを目標にしています。2学期ではディベート活動を通して身近な話題をテーマに取り上げていくことで普段の色々な学びが繋がっているなということを実感させたいと考えています。

福本：大学で学ばせたい者として、中学・高校で学習している一体何の役に立つんだという疑問に対して少しでも答えたいと思っていますので、学問はひとつに繋がっているという指導方針を聞き安心しました。

奥井：2年生は5月にテーマ設定を行ったことですが、どのくらい早まり、どの程度効果があったのでしょうか。

貝原：効果というより結果的に時間が不足だったので全体的に前倒ししなければならぬという物理的な問題が大きいかと思いますが、実際には班によっては夏休みに色々なところにインスピレーションに出かけたところもあり、すべてが5月までにテーマを決定するというのは難しかったのも事実です。夏休みを有効利用するためには5、6月にテーマを練っておかなければならないので、これからも目標としなければならぬと考えています。

(2) SOZAN 国際塾：磯本

課題研究の進化と5つの資質・能力の育成のために

○インプット…研究を促進する様々なインプットが重要と考え、多くの刺激を与える機会を充実させる

○アウトプット…たくさんさんの発表の場を経験することで生徒は成長していくので、積極的にアウトプットを増やしていく

○フィードバック…発表を通じてのフィードバックと自分自身の振り返り

昨年度との比較

活動2年目となり、意欲ある生徒が集まっていることが大きな成果である。

初年度はSGH 全国高校生フォーラムなどに参加する機会にはしぶしぶという様子であったが、今年度は立候補者に英文で要約を提出させ、その中から選考するという形がとれるようになった。

現状

・岡山大学の講義やミーティングに出席したほか、多方面からの様々な講義出席の要請に、年間10回、延べ25人の生徒が出席した。

・塾生3名がG20に出席して提言を行い、2名がスタンフォードプログラムを受講するなど、大きな舞台を経験することができた。

○インプット：テーマの設定について教頭より講義や助言・アドバイスを受けるなど、複数の教員からの指導、見学等の機会を増やした。

○相互フィードバック：一生涯命課題研究に取り組んでいる国際塾の生徒は鋭い視点での指摘ができ、2年生が1年生に良いアドバイスを与えている。

フィードバックをより生かすために無記名から記名方式にし、直接質問できるような形をとっている。

=連携=

岡山大学

アンバサダーキックオフミーティングに参加することで国際塾生のSDGsとの繋がりも深まることが期待できる。

SPICE (スタンフォード大学)

準備と時間を要する大変な経験であったが、世界の第一線で活躍している人からの直接の講義やディスカッションは貴重な体験となった。生徒に負荷が掛かる分、生徒は成長していくと感じた。

(生徒の感想) 大変だったけど自分の将来の目標が見つかった、英語ができなかったけどできると思える自分が変われた 等

セイクリッド・ハート・カレッジ (本年度姉妹校締結校)

○アウトプット：発表の機会の充実

・校内での発表の場が夏休み明け報告発表会と中間発表会と中間発表会が加わって従来の未来航路研究発表会リハーサルと合わせて3つに増えており、発表会に向けて研究が進む良い効果が得られた。

校内教職員、在校生、中学生への声掛けにより、生徒が緊張感を持って取り組めるとともに、活動を周知できている場になっている。

国際塾43名の長丁場になるため出入り自由としたことで多くのフィードバックが得られた。

・延べ30名が校外の発表の場に出ており、校内・校外合わせて1年間のうち10か月、誰かしら発表の場に出ている形を取っており、アクティブに動いている。

(G20 参加生徒の感想) 自分の限界に挑み続けるものであった、100回以上の発表原稿の練習を行った 等

大変な準備と練習を重ねた分、自分が成長できたことを実感し、これから世界に貢献していきたいとの意識を持つことができるとの成長につながった。

「SGH 全国高校生フォーラム」では平均以上の得点を得られ、審査員から「質疑応答のレベルが高く心が震えました」との素晴らしいメッセージをいただき、生徒の努力が報われたと感じた。自信が付き達成感を感じ成長してくれたことを実感した場面だった。

(生徒の感想) 自分たちは決して劣ったものではない、逆に自信を持つことができた、強い信念で努力を続けていきたい、もっと成長していこうと思える一日になった 等

今後の予定

・SGH 甲子園 (3月) プレゼンテーション部門とポスター部門において書類審査と動画で一次審査を通過し出場予定。

・オーストラリア海外研修 (3月) 未来航路発表会が終わり次第こちららに向けて始動。

来年度の課題

2年生はフィードバックを活発に行っている一方、1年生は研究が進んでからというところであったが、そろそろフィードバックを始める機会がある。様々な指導者からなるフィードバック国際塾は充実した学びの場となる多くの発表の機会がある。5年目を迎え国際塾は非常にアクティブに活動でき受け取ることができ、非常に恵まれている。

2年生はフィードバックを活発に行っている一方、1年生は研究が進んでからというところであったが、そろそろフィードバックを始める機会がある。様々な指導者からなるフィードバック国際塾は充実した学びの場となる多くの発表の機会がある。5年目を迎え国際塾は非常にアクティブに活動でき受け取ることができ、非常に恵まれている。

<意見交換・指導・助言>

神崎：保護者から、嶺山高校は色々なことをさせてくれる学校だと聞いていますが、生徒さんが前向きに取り組んでいることを理解している保護者がいるというのは先生方の努力が大きいと感じます。そのように取組み内容を保護者や関係者に拡げるといことは、生徒さんの動機づけとしても大事な部分だと思えますが、どのようにしていますか。

柴田：ホームページの充実ということが一つの要因と考えます。本校のホームページは更新のスピードが早く、多くの方が Facebook も使われていますので、それらを閲覧している保護者の方の数が増えてきたという印象があります。

奥井：特に良いと思ったのが、何回も発表の場があり、そこで研究がぐっと深まっていくということと、現代的で今の時代に合っている印象です。アメリカのソフトウェアのアップデートなど、ある程度のものでまず出していく、悪ければ変えていくというのが世界のスタンダードになっていますが、日本は120%のものでないと販売しないというメーカーさんも多くあります。それとは違うやり方で実際にやっているのがとても良いと思いました。

SPICE について質問ですが、昨年度までも参加していたのか、何人くらい、どうやってそのプログラムに参加できたのか、来年度 SGH の指定が外れても希望する生徒が取り組めるのかについてはいかががでしょうか。

磯本：以前からあり、全国から30名が参加しています。本年度は県から本校に参加していませんかという声掛けがあり、6名応募し、選考に通ったのが2名でした。後輩たちも今年度の様子を見ているので今後希望者が続くと思います。

ウィリアムズ：先ほどの SGH 甲子園のところ、英語によるプレゼンテーションの点数が6/10と一番低いのはなぜでしょうか。

磯本：英語の教員として、生徒の英語によるプレゼンテーションがスコアの低いものとは思っていません、非常によくできてきていると思っておりますが、この時は開始の合図が聞こえづらいというハプニングがあったこと、全国から中にはネイティブスピーカーではないのかと思うようなハイレベルな高校生が集まっている中で、評価の中で低く出てしまうのかなど。ここを伸ばしていくにはどれだけハイレベルな指導を展開していかなければならないのか、英語によるプレゼンテーションについてはなかなか嫌いなと感じているところなんです。

(3) GLOBAL STUDIES：山本

授業を通して5つの資質・能力を発展させていく

⇒ Global Can-do List を活用しながら授業改善を進める

○新年度が始まってすぐに授業ガイダンスを含め Global Can-do List の配付・説明を行い、生徒と動きを共有してから授業を開始する。

○10月・11月の教育研究会で成果となる授業実践を行い、校内外の研修の機会を設ける。

今年度、これまでの参加人数が常に校内合計120名を超えている点に注目すると、教科の枠を超えたお互いの授業参観が定着してきたと実感している。

他教科との繋がりができてコミュニケーションの場になり、生徒同士も教師も話題にしやすくなったことが大きい成果である。

授業改善

○各教科で研究会を行い、目標を立てて授業実践してきた。一つの話題に対して、複数の素材でひとつの活動を集大成で行う。

地歴 学習者と教師、学習者同士、資料と学習者 との対話的学び

数学 ジグソー法による課題学習的数学課題での取組み グループで自分の知っている情報をお互いに教えながら行う

理科 身近なものと科学 身の周りのものと学問との繋がりが

音楽 作曲 (県内初の取組み)

英語 コンテント(内容)と言語活動をバランスよく取り入れ、どのように言語活動を充実させていくことができるか

各教科の取組みに加え、クロームブックを使ってみようという学習会を開催し、まず教員が使ってみる

「クロームブックを使った授業実践」(2月6日)という研究会を校外に発信したところ、学校関係者だけでなく、クロームブックを扱っている業者を含む多くの申し込みがあった。

○研究紀要を作成し、内外に配布する。

○各教科の小テスト、アンケート、定期考査を活用しながら認知・非認知での生徒の変容を捉える。結果を研究紀要にも掲載の予定。

○中学校との手法の共有

Global Can-do List も様変わりをしていくよう新しい能力・資質を捉えなおし、次の準備に使えるよう修正を加え、それをもとにした授業改善を継続的に行っていきたい。

英語力向上プロジェクト

Global Can-do List を活用した授業の実践 ー授業改善と生徒の変容ー

○Global Can-do List 含んだ自己評価の実施

生徒からの PDCA 確立と、自由記述を捉えながら授業者の PDCA 確立

○GTCC 3年生の結果と評価

各授業の終わりに自己評価の時間を取り、資質と能力を自己評価し、自由に記述する。

・自由記述を注視しながら、3年間120名中4名の生徒を追った結果、「スキル」「やり取り」「興味関心」のフォーカスの仕方に注目すると、「やり取り」にフォーカスしていると「スキル」が上がっていかない。コンテント、言語学習自体に対して「興味関心」が強い生徒は「スキル」がどんどん上がっていく。いかに興味関心を植えていくかが大事であると読み解ける。

・GTCC の結果がB2、B1というかなりハイレベルなところから、A2という一般的な評価まで、年々そのスキルが上がっている。ハイレベルな生徒に対してコンテントを深いもの、興味深いものにしていけばスキルも上がっていくという可能性が見えてきた。

・高いレベルの平均値が出ている中でも特に顕著だったのは表現力の向上である。表現語彙の獲得が大きくなってきたが、少し伸ばすことができたのは授業改善を続けてきた結果の一つであると考ええる。

表現力が向上した裏にはインプットが必要であるが、即興性として初見のものを見て問題に答えるリーディングやリスニングではなく、自分が表現するために使うということが大事である。

- ・コンテンツとランゲージを統合した授業がこれからテーマになる。⇒ 中学教員とコラボし、チームティーチングで英語で理科の授業を行う（2月17日）。

<意見交換・指導・助言>

神崎：興味関心を植え付ける。惹きつけるためにどのようなことをされていますか。

山本：まず素材に対する興味関心として、最初の授業に入るときの発話は何であるかという、発話の研究が大事だと思います。また色々な人と意見をシェアしながら興味を持ったことへの関心を高めさせ、タイミングを見ながら関連素材をどんどん入れていくということをしています。

奥井：理科の授業を英語で行うということですが、そのような取り組みはこれまでににはされていなかったのですか。

山本：英語の授業ではそのようなクリル的な発想を取り入れながらやってきたのですが、他の教科と実際にやるということではできていませんでした。実験的に単発的な校内研修ということによってやることにしました。

矢吹：理科の教員は理科の教員としてのアプローチ、あくまで理科の目標を達成するようアプローチを英語でやっていくということですが、その中で理科のコンテンツの部分とランゲージの部分の両面を見てフィードバックを返していくということを統合的にやっていくと考えると考えています。教科の中で日本語を介さずに英語で名前を通してやっていくということ、英語のランゲージの獲得を狙って実験的にやってみて、うまく行ったらこれからも引き続きこのような授業を進めていけたらと思います。英語のコンテンツに興味が出てきたら相乗効果で良い結果が得られるのではないかと期待しています。

福本：5年間を通じての授業改善ということ、先生方は特にどうようなことに注力されてきましたか。

山本：常に深い学びを目標としています。いくら活動が活発でも、頭の中が働いていなければ、深い学びを有効的に活用できなければ、学びとしての質は低くなると思います。5つの資質の中でも「幅広く深い教養」を突き詰めていきたいと考えています。

(4) SGH 事業の成果と課題今後について：柴田

5年間を振り返って

国立大学の推薦・AO 入試受験者数は5年前と比べて倍増し、合格者数も増加してきている。

要因1 グループ学習・ペア学習など対話的アクティブラーニングによる授業改善

2 課題研究の充実

3 システムの変化（推薦・AO 入試の増加）

外部評価

ベネッセ GPS-Academic

問題を解決する力のうちの思考力(批判的)的思考力:情報を抽出し吟味する 論理的に組み立てて表現する/協働的思考力:他者との共通点や違いを理解する 社会に参画し人と関わりあり/創造的思考力:情報を関連付ける類推する 問題を見出し解決策を生み出す)を計った結果

H29~H30の変化(どの学年も同じテストを受ける)

批判的思考力、創造的思考力については全国平均より伸び率が高い。

反面、協働的思考力はやや減少している。全国的な傾向であり、受験者数が年々倍増しているための問題のブレが一因ではあるが、一つの課題であると考ええる。

校内アンケートによる生徒の変容(4年前と令和元年度と比較)

SGH 事業や未来航路の狙いに対する理解の深まり、高い目標を持つようになった、授業に積極的に参加している、授業は将来に役立っている等、意識の向上が見られる。

要因：目標をもって本校に入学している、中学校にも周知できた、教材開発、授業改善の成果、

PC や書画カメラ、ICT 機器等活用の普及

教師の変化

SGH 事業への理解が進んだ。

要因：実際に教員が SGH を経験してみた、授業改善、PC や書画カメラ、ICT 機器等活用の普及 保護者の変化

SGH 事業への理解が進んだ。

要因：HP や Facebook からの効果的な情報発信

保護者から見たとときに未来航路・学校の授業へ前向きに取り組んでいるか⇒ やや上昇

課題・問題点

・将来的に国際的視野に立った活動や仕事をしたいと思うか⇒ 変化なし

生徒にとつての高い目標とは大学や学科に対するものに留まり、その目標は高くなっているが、グローバルな視野という点での変容は見られない。

・家庭学習を計画的に行っているか⇒ 変化なし

授業に対する意欲関心は高まってきているが、行動・家庭学習にまでは高まっていない。興味関心をいかに行動に繋げていくかが課題である。

・学校の図書館を利用しているか⇒ 変化なし

インターネットを活用しての調べ学習は良くやるが、一冊の本を読んでしっかり教養を蓄えるといったことは進んでいない。

今後に向けて

WWL 事業のテーマ：未来の岡山と世界の Well-being の実現に貢献するグローバルリーダーの育成 連携校 県内の中高一貫校・美業高校 海外姉妹校 等

協働機関 岡山大学 岡山県立大学 県経団連 企業 関係国際機関 岡山県 岡山市 等

具体的取り組み ・SDG s をテーマとした課題研究や合同課題研究発表会(他校生徒も参加)

・web 会議システムを活用した国際共同研究(海外の高校も含む)

・合同留学報告会(実際に海外留学から帰ってきた生徒や「アジア高校生架け橋プロジェクト」等で海外から留学してきている生徒との報告会)や大学の外国人留学生による指導

・大学教育の先取り履修

・グローバル合同(他校生徒も参加)

・SDG s パス(夏休みに企業を研修して廻る)

・高度な学びの推進(学校独自の教科・科目の創設⇒ データサイエンスなど含む)学校設定科目を含む操山ステイム)

・海外研修(他校生徒も参加)

<意見交換・指導・助言>

神崎：図書館利用についての改善策は何かありますか？

柴田：毎年2年生になる春休みにブックレポートの課題を出し、本を2冊以上読むよう指導していますが成果が出にくく、すぐコンピュータやネットで調べて済ませてしまっていて、専門書を何冊か読んで教養を深めてほしいが、改善まで至らない状況です。

神崎：何か調べものをした時に、それに応じた文献を持ってきて引用し、引用した部分をきっちり表記していきながら深く研究していくことはこれまでもこれからも変わらないと思うのですが、何冊読みながら深く研究していきたくないというものはありますか？

奥井：行動はなかなか変わっていないとのことでしたが、5年間で姿勢は確実に変わってきていることがデータで出ていますから、行動は同じ時間であっても本人の積極性などによっても違ってくると思います。数字では表れてなくても、中身は確実に良い方向に変わってきているという印象を受けます。

質問ですが、WWL 事業の指定を取れなかった場合、SGH の取組みの流れの中で、どのものは続けられられないという想定はされていますか？

柴田：未来航路については継続できるかと思いますが、難しいのはお金が掛かるところで、国際塾でいうと、グローバル合宿や関西学院の受講には費用を要します。高校生フォーラムやSGH 甲子園、探究甲子園はSGH 校だから声が掛かっており、行く予算についても今は生徒の負担はありませんが、持続可能に向けてこれからの負担面を解決していかなければいけないところです。予算が掛からないものについてはそのまま継続していきたいと考えています。

福本：生徒が学びたいことを学べるという意欲を強く持つようになりたいという印象を受けていますが、その手ごたえはありますか？

柴田：フォーラムなどの参加に際して、以前の誰が行く？から、行かせてくださいに変化し、その中から選抜できるようにしたこと、課題研究でも、外に行きたい、企業に行かせてくださいといったような積極的な声が生徒の方から出始めているのは大きいと感じています。

福本：生徒の中で変わってきたものが未来に向けてどう結びついていくかについて、もう一段周りが支えてあげると良いと思います。子どもたちがこの先どう生きていくのか、未来の進展、展開がどうなっていくか、かつてのようにこの大学に入れば安全な道が進めるなどは保護者の皆さんも思っていないと思うのですが、他に代わるものがないという、そのような中で色々なモデルをこの取組を通して作ろうとしているところで、それを保護者にも理解していただければ生徒さんの振る舞い方も変わるのではないかなという気がします。

『大学はもう死んでいる？』（吉見俊哉・新谷剛彦著）という本では、日本の大学がいかに今だめになりつつあるか、アメリカやイギリスの大学生と比べた時に、このままでは置いてけぼりになるだろうと警鐘を鳴らしています。コアになっていくのがカリキュラムの負担で、稚拙なことを教師が生徒に教えて学生がそれを受け取って満足している現状を変えていくことが重要であると。大学を変えれば何とかなるものではなく、社会全体が「知」なるものを尊重するような社会にならないと厳しいだろうと思います。こうしたことが日本を疲弊させていくのではないかと警告する内容になっています。

社会を変えていく、そのような良いモデルがここにあるなと感じました。

<授業見学後の意見交換・指導・助言>

福本：明日の発表を楽しみにしている様子が伺え、発表する方もそうですが、聴く生徒たちがしっかり聴いていくのが印象的でした。

奥井：皆さん積極的にやっているという感じがひしひしと伝わってきて、これは簡単なことではありませぬから、この5年間の積み重ねの成果だと感じました。

神崎：それぞれのテーマが、私たちも感じているような問題を的確に捉えているなど、凄いなと感じました。それから、これはちょっとどうかかなと思うようなこともやり切っているのが良いと思います。おそらく先生が手を入れるところはないんだらうと思うようなところをやり切っています、最初に掲げたものと論議は相関性が薄いかなと思うところも一部あったのですが、自分たちでやり切っているところが印象に残りました。

福本：1年生が新聞を見てSDG s を話題にしている点に凄いなと感じる一方で、今の段階で彼らはどのようSDG s を捉えているのかなと。高校1年生で、社会的な関心の部分で、切り抜かれていた社説欄などハードルの高いものですが、読み込んでいるとすると、凄いなと。さらに自分たちとSDG s が彼らの中でどう繋がっているのかなと。いかがでしょうか。

福本：前回の授業で初めてSDG s について触れ、今日が2回目です。今回は新聞を題材に目標にはこんなものがあるんだということに慣れ親しませるところで、今回は新聞を題材にして社会に起こっている出来事とSDG s は関連しているんだということに気づかせるのを目標にして取り組んでいます。今回は導入として、身近なところからSDG s があるのか調べてみましょうということですが、岡山大学と地元企業がどんなSDG s をやっているのかホームページで調べたいことを今日の宿題としています。

森：「自分たちにどう関係があるのか」ということがキーワードでしたが、WWL の申請に当たっても、生徒は大きな課題やテーマについては知っていますが、身近なところの課題を見つけたら追いついていくところまでできておらず、自分事から世界にどう関連させられるか、それが今の課題であり、そこを何とかしようというのが次のステージの大きなテーマであると考えています。

JICA に電話した際にも、「世界の途上国に対して自分事として考えてください」と、そこでもキーワードとして与えられ、やはりこれが必要なんだらうなと。これからやらなければならないことが沢山あるなと感じています。

福本：世の中の現状に対して興味というレベルでどうなのか、自分がそこへ将来関わっていくという主体的な意識を持てるのが、本質的な幅り下げは学問というだけではなく生きていくうえでのキャリアを開発していくというきっかけになると思うのです。

以前、学生になぜ栄養学科にきたのか語ねたところ、中学校のある体験を語ってくれたのですが、正直私は小学校や中学校の体験が大学進学まで続いていかなかったのですが、身近な大学生の話やまで強いものになると、ちょっとしたきっかけが自分の進むべき道を進めてくれると。そのモデルがない子は大学に入って苦労するんですね。なぜここを選んだのかと、なんとなく偏差値的にどうだとか、得意な教科がこうだとか。苦労している子と自分でやりたいことを見つけた子とは大きな違いがあるのではないかなと思います。

その時のキーワードが、「自分の問題とそれがどう関わってくるのか」という目線で見えているかだと感じています。

また、授業見学で、ペアワークで自分たちを対象にしてペアワークの効力化について分析してい

たのは、目の付け所が面白いと思いました。なかなか学者でも思いつかないようなことで、さすが高校生だなと。ちょっとしたことなのですが、そこが社会心理学に発展していくかもしれないし、協働性というところが発展していくかもしれません。そんな種が沢山あると感じました。

奥井：二つ大事なことがあると感じています。一つには実現可能性というところで、生徒さんがどれくらいSDGsの提案の実現性を理解しているのか、こんなこと実際にはできないが、授業の一貫だから皆でままとったのでこれを発表しますということはあると思いますが、実際にこれをやってみることができるのかということと、それぞれがどれくらい考えているかが重要だと感じています。それが発展していくと、実際のビジネスなどに繋がっていくものになると思います。何十グループもの提案が全部実現できることはかなりではないと思いますが、実現性がどれくらいなのかということに参加しているメンバーが同じようなイメージを持っていることがとても大事だと思います。あるいは先生とも、実現は難しいかもしれないがこのようなことができたらずばらしいという認知や共通理解がポイントになると思います。

もう一つには持続可能性で、SDGs最大の課題でもあります。持続させることは始めることよりもハードルが高いです。SDGsについていうと、岡山はじめ全国の経済界がシンポジウムを開催したり、授業で取り上げたり、意見交換を行っています。企業のアクションとして継続していくことの難しさを考えられているのだと思います。日本の企業はそもそもSDGsに叶ったやり方をやってきているので、今でもできているという考え方があっては思いますが、企業は社会から具体的にどれがそうなんだとアクションを見られている状態なので、企業側のプレッシャーもあるでしょう。実現性、持続可能性を高校生に考えてもらうのは良い機会になると思います。

神崎：グループによるのかもしれませんが、もっと面白いがやがややっていてもいいのかなと思いました。パワーポイントを使っているグループもありましたが、資料のサイズが人によって変わっているなどして、全体を見てみんなこれに統一しようというように、全体をまとめるリーダーはいないのかなと。個性はあって良いと思いますが、ひとつのものをまとめるならある程度ルールは必要で、それぞれが役割分担をしながら全体がまとまっていくよう、それぞれが仕切っていくようになれば一層合理的な活動になるのではないのでしょうか。

森：来年度からクロームブックに資料など各パート各自で入力していきますから、そういうことが起きやすいので注意が必要だと思います。次のご意見ありがとうございます。

令和元年度 スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書（5年次）

令和2年3月31日

発行 岡山県立岡山操山中学校・高等学校
〒703-8573 岡山県岡山市中区浜412番地
TEL086(272)1241 Fax086(272)1721

印刷所 旭総合印刷株式会社
〒700-0824 岡山県岡山市北区内山下2-10-3
TEL086(232)3311 Fax086(232)1333

